様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２３２０１５３

研究課題名（和文）擦文文化・トビニタイ文化・オホーツク文化終末期の広域編年研究

研究課題名（英文）Broader-based chronological research of the Satsuma culture, Tobinitai culture, and Okhotsk culture end term

研究代表者
柳澤　清一（Yanagisawa, Seiichi）

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：１０３３４１６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,400,000円、（間接経費）　4,020,000円

研究成果の概要（和文）：当該研究は、オホーツク文化・擦文文化・トビニタイ文化の終末期をめぐる通説的な編年体系を見直し、それに代わる新編年体系の妥当性について広域的に証明することを目標としている。2010～2013年にかけて、道北と道東をフィールドとして発掘調査と資料調査を計画通りに実施した。その成果をもとに多くの論文を発表し、またそれらを著書としてまとめ、新編年体系の妥当性を明らかにする大きな成果を挙げた。研究の成果は次のとおりである。(1) 学術雑誌論文（2010～2014：19）(2) 著書(1)：六一書房、2011、(3) 発掘調査概報（2010～2014：7）。

研究成果の概要（英文）：The research concerned improves the accepted theory of chronology system involving the end stage of the Okhotsk culture, Satsumon culture, and Tobinitai culture, and aims at what is proved over a very wide area about the validity of the new chronology system replaced with it. Over 2010 to 2013, by making North Hokkaido and East Hokkaido into the field, mostly, many excavations and investigation of the existing data were conducted as planned. Many papers and excavation briefings were announced based on the result, they were summarized as a work, and the important result which clarifies validity of a new chronology system was obtained. The result of research and investigation is as follows:(1) Scientific journal paper (19:2010-2014),(2) Scientific writing (1), Rokuichi Bookstores, 2011,(3) Excavation briefing(2010-2014:(7)).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：オホーツク文化　擦文文化　トビニタイ文化　広域編年　終末期

１．研究開始当初の背景

北海道考古学の主題といえば、誰もが先住民である「アイヌ民族・文化」の解明をあげるであろう。戦前・戦後、多くの研究者がこのテーマに取り組み、研鑽を続けている。しかし、いまだ先史考古学の方法をもって、この問題を解明するには至っていない。そもそも、このテーマに取り組むためには、先史時代の文物の変遷を正しく捉え、実年代と対比した精密な「編年体系」が不可欠である。この方面の基礎研究は、東京・筑波・北海道の諸大学・北海道埋蔵文化財センター・北海道開拓記念館などによって推進され、大方の研究者が支持する全道レベルの編年体系（通説編年）が整えられている（図１）。

それによると、12～13・14世紀に消滅したとされる「擦文文化」が唯一の「アイヌ文化」の母体とみなされる。そしてサハリン島から渡来した「オホーツク文化」は、それより数百年も早く、9世紀末に消滅したと考える。しかしながら、アイヌ民族の精神文化を象徴する神々（ヒグマ・シャチ・シマフクロウ）を模した遺物は、道東の「オホーツク文化」には存在するが、「擦文文化」やオホーツク文化が変容して誕生したとされる「トビニタイ文化」（10～13・14世紀）には、これまで一度も検出されたことがない（図２）。

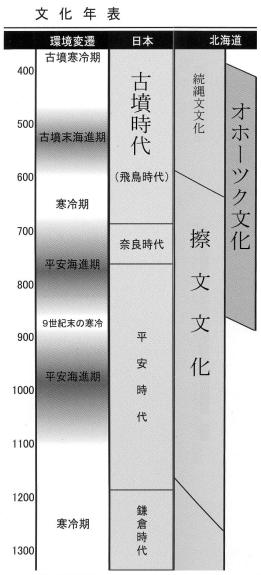

図1. 北海道開拓記念館他編(2008)を改変

これは、いかにも矛盾した話である。つまり通説編年にもとづく北方史では、北海道島の「先住民族族」である「アイヌ」の神々の由来を、遙か300～400年以上も昔に消滅したはずの「オホーツク文化」に求めるのである。これは考古学的に物証を欠いた想像説といえよう。したがって、1980年代以後に形成された、通説の北方編年案は証明が不十分であると言わざるを得ない。申請者は1999年よりその点を明確に指摘し、道東と道北のオホーツク文化を12世紀まで存続させた新北方編年体系（逆転編年説）を提案している。2007年には、その仮説をまとめた新著、『北方考古学の新地平』（六一書房、672頁）を刊行した。

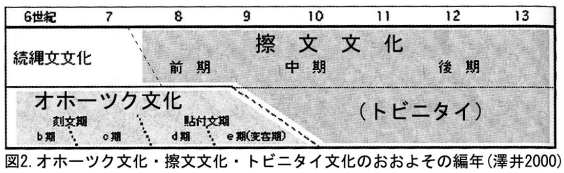

図2. オホーツク文化・擦文文化・トビニタイ文化のおおよその編年(澤井2000)

本研究では、この新著で提案した「編年体系」（630頁）のうち、北海道島の部分を精密化したい。具体的には道東と道北の重要遺跡を発掘し、また、実査を通じて既存資料を見直し、それらをもとに各文化の終末期（貼付文系土器群：ソーメン文土器ほか）の時代相を解明する。そしてその成果を踏まえて通説的なアイヌ民族成立前史を書き改め、我が国北方「先住民族史」研究の意義を列島史的に見直すための年代学上の基盤を整えたい。

つぎに研究動向との係わりである。北方考古学の研究は大きく三地域で展開されてきた。

(1) 続縄文から「オホーツク文化」への移行過程を探る試み（道北部）
(2) 網走・常呂・斜里周辺域における「オホーツク文化」の解明（道東北部）
(3) 根室半島域における「オホーツク文化」の集落研究（道東南部）

このように北海道島内の発掘調査は、独立的な、「地域棲み分け」方式で実施されており、その主たるテーマは、サハリン島から渡来した「オホーツク文化」の解明に特化している。これに対し、通説において「アイヌ文化」の母体とされる「擦文文化」や「トビニタイ文化」、「元地文化」の発掘調査は、道東・道北のどちらでも、1980年代以降になると、組織的・継続的な活動は見られなくなる。

したがって「アイヌ文化」の成立史、すなわち北海道島における先住民族前史の考古学的な研究活動は、道北・道東では停滞的な状況にあるといえる。そこで、これまでに蓄積された「オホーツク文化」終末期の資料を参照し、「擦文文化」(Ⅳ末～Ⅴ期)・「トビニタイ文化」終末（Ⅰ・Ⅰ-Ⅱ期）遺跡、元地文化の遺跡を発掘し、既存資料を見直すことは、時宜にかなった企画であるといえよう。

この試みによって、環オホーツク海域における「逆転編年説」の妥当性が検証されるならば、北海道島の先史時代はもちろん、通説の北日本古代・中世史像の見直しにも繋がる

成果となろう。また逆転編年説の検証作業は、「アイヌ民族」を日本国の「先住民族」と認めた官房長官発言（2008 年政府見解）を実証レベルで考古学的に解明する上でも、きわめて重要な意義を持つと考えられる。

２．研究の目的

北海道島の先史時代は、通説によると「続縄文文化→擦文文化→アイヌ文化」へと推移する。他方、サハリン島から渡来した「オホーツク文化」は、９世紀末には擦文文化に圧倒され、道北では「元地文化」へ、道東では「トビニタイ文化」へと変貌し、やがて擦文文化に同化・融合すると説明されている。しかし、これは「考古学的に証明された史実」とは、とうてい認められない。

道東における千葉大学の発掘調査では、「擦文文化(末期)」→トビニタイ文化（Ⅱ）→アイヌ文化」という、逆転した文化序列が層位的に証明されている。道北でも、同じ事実が報告されている。本研究では、これらの層位事実を発掘調査で再確認する。また、各機関に収蔵された既存資料を見直し、政府が先住民族と認めたアイヌが、北海道島に成立する前時代、すなわち「終末期」における複雑な諸文化の様相を、新しい「逆転編年説」の観点から解明することを調査目標とする。

３．研究の方法

本研究は、⑴ 道東における竪穴住居跡の発掘調査、⑵ 道北における文化層の小規模な試掘調査、⑶ 礼文・利尻島、オホーツク海沿岸、知床半島～標津町周辺域における、既存資料の実査をもって構成する。⑴・⑵の発掘調査では、通説に代わる北海道島の新しい北方編年体系（前掲頁を参照）の妥当性を層位事実によって証明する。⑶の資料実査では、既存資料の丹念な見直しを行う。忘失された逆転「層位事実」を再確認し、⑴・⑵の成果をふまえて、広域的な「終末期」土器の比較研究を進める。

なお⑴・⑵の成果は、各年度内に調査概報として公表し、⑶の成果は、個別論文として連続的に発表する。４年間の総括的な成果は新著、『北方考古学の新展開』として刊行し、シンポジウムや記者会見による新学説 の発表、講演会又はシンポジウムなどの開催、ホームページの開設によって、社会的な広報・発信に努めたい。

本研究は、平成 22～25 年の 4 ケ年を予定する。調査・研究・実査のフィールドは、主に道北・道東（礼文・利尻島から知床・標津町、根室半島域）を対象とする。準備が整いしだい、重点的に道北・道東の遺跡を継続的に発掘し、「オホーツク・トビニタイ・擦文文化」終末期における年代学的な様相を、⑴層位事実、⑵キメラ(折衷)土器、⑶Ma-b 火山灰、⑷B-Tm 火山灰などを手掛かりとして、「逆転編年説」の立場から精密に解明し、新しい編年体系を樹立する。また、それに基づいて、北海道島における「アイヌ民族」成立前史の様相を広域的に考察することを、将来における研究の課題とする。

４．研究成果

各年度の活動内容のあらましを列挙する。

⑴ 平成 22（2010）年度

昨年度は、4年間の研究期間のうち、発掘調査の準備年として位置づけている。
そこで道北の礼文・利尻島と、道東の中標津町において、発掘調査の実施に伴う諸々の問題点を探り、本研究のテーマ解決に最もふさわしい遺跡を選定し、それぞれ以下のような準備作業を完了した。

道北

- 礼文島浜中２遺跡の資料実査・発掘を内定。地主さんとの折衝。
- 浜中２遺跡・香深井５遺跡などの調査資料の実査。
- 北海道大学との発掘調査期間の調整。
- 利尻島の発掘予定遺跡の実査、既存資料の下見。

道東

- 中標津町内の遺跡探査と資料の実査。
- 教育委員会・博物館担当者との打ち合わせ、現地・地主さんとの折衝。
- 調査遺跡（鱒川３遺跡）の選定と地形測量・発掘区の設定。
- 伊茶仁ふ化場第１遺跡の発掘調査の実施

⑵ 平成23（2011）年度

昨年度の準備を踏まえて、本年度より礼文島浜中２遺跡の発掘調査をスタートさせた。道東部では標津町から中標津町へ移動し、鱒川弟３遺跡の発掘調査実習を実施した。また

、これらの調査に加えて、年度初めの予定を変更し、東京・北海道の機関に所蔵されたオホーツク文化資料の実査を行い、本研究の目的にかなう有益な情報を入手した。活動の概要は以下のとおりである。

道北

・礼文島浜中２遺跡の測量（2011年7月31日～8月8日）

・浜中２遺跡第１次発掘調査（2012年4月27日～5月11日：第Ⅰ・Ⅱ地点。

・調査資料の整理と概報の作成（5月～2013年2月）。3月9日に概報（45頁）を刊行）。

・北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・札幌大学において、礼文島及びオホーツク海沿岸・千島列島のオホーツク文化資料を実査（3月13・14日）。

道東

・中標津町鱒川第３遺跡第１次発掘調査（9月5日～22日）。

・調査資料の整理と概報の作成（10月～2月）。3月9日に概報（25頁）を刊行。

・北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・札幌大学・北海道大学総合博物館において、網走市・南千島のオホーツク文化資料の実査（3月15・16日）。

・東京大学文学部考古学研究室において網走市のオホーツク文化資料を実査（3月22日）。

なお2011年5月に、これまでの研究成果を見直し、書き下ろし論文４本を加えた新著、『北方考古学の新展開』（六一書房、400頁）を刊行した。これは本研究における、一連の調査成果をふまえて執筆したものである。

⑶ 平成24（2012）年度

昨年度の調査成果を踏まえて、本年度は礼文島浜中２遺跡の第２次発掘調査を実施した。道東部では中標津町において、鱒川弟３遺跡及び当幌川遺跡の発掘実習を同時に実施した。両遺跡の調査で通説の見直しに繋がる重要な資料と層位的な事実を把握した。また、これらの調査に加えて、北海道の諸機関に所蔵されている、オホーツク文化・擦文文化の資料実査を行い、本研究の目的にかなう有益な情報を入手した。活動の概要を以下に示す。

道北・道央

・浜中２遺跡（第2次）発掘調査（2012年4月22日～5月9日）：第Ⅰ地点、第Ⅱ地点、第Ⅲ地点。

・浜中２遺跡資料の整理、概報作成（5月～2013年2月）。調査概報（130頁）の刊行。

・北海道大学フィールド科学センター・恵庭市郷土資料館・北海道埋蔵文化財センターにおいて、オホーツク文化・擦文文化資料の実査（3月13・14日）。

道東

・鱒川第３遺跡（第2次）・当幌川遺跡（第1次）発掘調査（2012年8月30日～9月16日）。

・鱒川第３遺跡資料の整理、概報の作成（10月～2013年2月）。調査概報（35頁）を刊行。

・北海道大学フィールド科学センターにおいてオホーツク文化資料の実査（3月5～7日）。

本州

・秋田県埋蔵文化財センターにおいて須恵器の実査（2012年11月15～16日）。

⑷ 平成25（2013）年度

本年度は当該研究の最終年度に当たる。道北では礼文島浜中２遺跡の調査を行い、道東部では中標津町の当幌川遺跡の実習調査を実施した。また、道央・道北の諸機関に所蔵されたオホーツク文化資料を実査し、本研究の目的に合致した情報を入手した。活動の概要を以下に示す。

道北

・礼文島浜中２遺跡（第3次）発掘調査量（2013年4月22日～5月9日）第Ⅰ～Ⅲ地点。

・調査資料の整理と概報の作成（5月～2014年2月）。3月に刊行（146頁）。

・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・北海道大学総合博物館・紋別市立博物館・旭川博物館において、礼文島・オホーツク海沿岸などのオホーツク文化資料を実査（3月25～28日）。

道東

・中標津町鱒川第3遺跡第２次発掘調査（8月30日～9月16日）。
・調査資料の整理と概報の作成（10月～2月）。3月に刊行（25頁）。
・旭川博物館等において道東オホーツク文化・擦文文化資料を実査（3月25～28日）。

なお現在、これまでの道北・道東における発掘調査と研究の成果をまとめた新著『北方考古学の新潮流』（六一書房）を準備しており、今年度中には、550～560頁の専著として刊行する予定である。本書は、本研究における４年間の研究成果について環オホーツク海域を舞台として総合的に纏めたものである。

浜中２遺跡の調査では、第Ⅰ地点において、目的としていたオホーツク文化終末期の未知の文化層の検出に再び成功した。また第Ⅱ地点でも、元地式の変遷に係わる新知見を獲得した。第 2 次及び第 3 次の調査によって、道北にもソーメン紋を伴う厚手系土器の時期が仮説どおり存在すると層位的に実証された。その結果、道北並びに道東の通説的な編年観は、「逆転編年」説の観点から根本的な見直しが求められることとなった。こうした成果をふまえて、後掲のごとく、これまでに数多くの論文を発表してきた。

当該研究では、予備調査も含めて予定どおりに、４ヶ年に亘って道北と道東で発掘調査と資料実査を行い、目的としていたオホーツク文化と擦紋文化の終焉期における年代学的な関係性について、仮説どおりの画期的な新所見を得ることができた。その成果は先に触れたように「新著」として刊行する予定あるが、当該研究は、それで完了するわけではない。今後とも、小規模な発掘調査と資料実査を継続的に展開し、その成果を纏めて４冊目の北方考古学専著を刊行する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 15 件）

①柳澤清一　紋別・枝幸・稚内における「オホーツク式土器」と擦紋土器の編年、古代、査読無、132 号、2014、pp.99-147
②柳澤清一　擦紋Ⅱ・Ⅲ期における通説「道東」編年の検証、（千葉大学）人文研究、査読無、43 号、2014、pp.25-90
③柳澤清一　礼文島浜中 2 遺跡（1990 年度）調査資料の編年、古代、査読有、131 号、2013、pp.143-184
④柳澤清一　「オホーツク文化」と擦文文化の接触、同化、融合説、（千葉大学大学院）人文社会科研究科研究プロジェクト報告書、査読無、251 集、2013、pp.106-148
⑤柳澤清一　いわゆる「東大編年」と山内博士「北方編年」説の相克、（千葉大学）人文研究、査読無、42 号、2013、pp.57-140
⑥柳澤清一　いわゆる「元地式」（「接触様式」）編年の再検討、古代、査読有、128 号、2012、pp113-160
⑦柳澤清一　ウサクマイ N 遺跡出土のソーメン紋土器の年代、古代、査読有、127 号、2012、pp.163-194
⑧柳澤清一　新北方編年案と B-Tm 火山灰から見た蕨手刀の副葬年代、古代、査読有、126 号、2012、pp.151-189
⑨柳澤清一　旧常呂町・斜里町における新北方編年案の検証、古代、査読有、126 号、2012、pp.101-150
⑩柳澤清一　北見国「枝幸 1・2・5 号竪穴」出土土器の検討、（千葉大学）人文研究、査読無、41 号、2012、pp.35-82
⑪柳澤清一　道東部における竪穴住居跡の変遷とトビニタイ土器群Ⅱの成立、物質文化、査読有、91 号、2011、pp.23-52
⑫柳澤清一　擦紋Ⅳ期における擬縄貼付紋土器の小細別編年、（千葉大学）人文研究、査読無、40号、2011、pp.73-1131
⑬柳澤清一　「南貝塚式」から見た環宗谷海峡編年案の検討、古代、査読有、124 号、2011、pp.97-132
⑭柳澤清一　道東における新北方編年体系の検証、（千葉大学）人文研究、査読無、39 号、2010、pp.37-93
⑮柳澤清一　道東擦紋Ⅳ期における小細別編年の検討（予察）、（千葉大学大学院）人文社会科研究科研究プロジェクト報告書、査読無、128集、2010、pp.111-152

〔学会発表〕（計 1 件）

① 柳澤清一　北方考古学の過去と現在、東京大学理学部人類学教室　公開セミナー、2013 年 7 月 12 日、理学部 2 号館

〔図書〕（計 14 件）

①柳澤清一編　型式論の実践的研究Ⅱ、（千

葉大学大学院）人文社会科研究科研究プロジェクト報告書、276 集、同研究科、2014、pp1-257
②柳澤清一　香深井 1(A)遺跡における「オホーツク式土器」年代観の改訂、型式論の実践的研究Ⅱ、（千葉大学大学院）人文社会科研究科研究プロジェクト報告書、276 集、同研究科、2014、257（pp141-191）
③千葉大学考古学研究室編（柳澤清一）北海道礼文町　浜中２遺跡　第３次発掘調査概報、2014、pp.1-146
④藤田　尚・村上浩代　2013 年度浜中 2 遺跡における出土人骨について、北海道礼文町　浜中２遺跡　第 3 次発掘調査概報、2014、146（pp.135-140）
⑤千葉大学考古学研究室編（柳澤清一）北海道中標津町　鱒川第３遺跡第２次発掘調査概報、2013、pp.1-27
⑥柳澤清一編　型式論の実践的研究Ⅰ、（千葉大学大学院）人文社会科研究科研究プロジェクト報告書、251 集、同研究科、2013、pp1-168
⑦千葉大学考古学研究室編（柳澤清一）北海道礼文町　浜中２遺跡第２次発掘調査概報、2013、pp.1-130
⑧藤田　尚・村上浩代　2012 年度浜中 2 遺跡発掘調査における出土人骨について、北海道礼文町　浜中２遺跡第２次発掘調査概報、2013、130（pp.120-121）
⑨柳澤清一　環根室海峡圏における貼付紋系土器の対比、　千葉大学文学部考古学研究室30周年記念　考古学論孜　Ⅰ、査読無、2012、739（pp.645-664）
⑩柳澤清一　佐藤達夫のポスト「擦紋Ⅴ」期編年の成り立ち、同成社、技術と交流の考古学（岡内三眞先生古稀記念論集）、査読無、2012、734（pp712-725）
⑪千葉大学考古学研究室編（柳澤清一）北海道中標津町　鱒川第３遺跡第１次発掘調査概報、2012、pp1-25
⑫千葉大学考古学研究室編（柳澤清一）北海道礼文町　浜中２遺跡　第１次発掘調査概報、2012、pp.1-45
⑬柳澤清一　北方考古学の新展開、六一書房、2011、pp.1-400
⑭柳澤清一　擦紋Ⅲ期における環宗谷海峡編年の検討、比較考古学の新地平、同成社、査読有、2010、1122（784-794）

６．研究組織

(1)研究代表者
柳澤　清一（YANAGISAWA、seiichi）
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：10334161
(2)研究分担者
岡本　東三（OKAMOTO、tozo）
千葉大学・文学部・名誉教授
研究者番号：00000498
(3)連携研究者
藤田　尚（FUJITA、nao）
新潟県立看護大学・准教授
研究者番号：40278007
百原　新（MOMOHARA、arata）
千葉大学・園芸学部・准教授
研究者番号：00250150
田邊　由美子（TANABE、yumiko）
千葉県立中央博物館・研究員
研究者番号：10342883